

今年の聖霊降臨日は5月28日だった。この日はギリシア語で「ペンテコステ」と言い、「第50」という意味である。ユダヤ教の三大祝祭の一つ、穀物の収穫を感謝する祭で、逾越祭の後50日目にあたり、日本語では「五旬祭」と訳している。使徒言行録2章に、この日の出来事が書かれている。「五旬祭の日が来て、皆が同じ場所に集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話しだした（2:1～4）。」

主イエスは十字架にかけられ、息を引き取られた。弟子たちは絶望のどん底に落とされた。ところが、三日目に、神によって復活させられ、弟子たちにご自分を現わされ、死を超えて永遠に生き給う神の子であることを啓示された。弟子たちにとって、これ以上の喜びはない。復活した主イエスから、神が約束したものを送るから、待つようにと言われた。そして、ペンテコステの日、120人ほどの弟子たちが集まっていると、上記のように約束の聖霊が降った。聖霊は激しい風のような音と炎のような舌という形で降った。大きな物音に何かと、大勢の人たちが集まって来た。聖霊を受けた弟子たちは、聖霊に押し出されて「神の偉大な業」について、人々に語った。彼らの語った言葉は故郷の言葉を聞くように、皆、理解することができた。聖霊を受けた人々が等しく理解できた「神の偉大な業」を、ペトロが説教で説き明かしている。

ペトロは、預言者ヨエルを通して「私は、すべての肉なる者にわが霊を注ぐ」と言われた聖霊降臨の預言が成就したと語り出し、主イエスに起こった出来事を語った。そして、主イエスは磔にされ、殺されたが、死の苦しみから解放され、復活させられた。私たちは、復活した主イエスに出会った証人である。最後に「だから、イスラエルの家はみな、はっきりと知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」と締めくくった。人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、「兄弟たち、私たちは何をなすべきでしょうか」と問うた。ペトロは「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう」と答えた。その日に洗礼を受け、仲間に加わった人が三千人ほどあったという。この共同体が心と言葉が通じ合うキリストの教会である。従って、聖霊降臨日は教会の誕生日でもある。

この日、この時、何が起こったのか。ナザレのイエスは私たちに救ってくれた主キリストであるという信仰を共有する奇跡が聖霊によって起こった。パウロは、このことを1コリント書12章3節bで「聖霊によらなければ、誰も『イエスは主である』と言うことはできません」と述べている。聖霊がイエスを主キリストと信じ、告白させるのである。旧約聖書では、「霊」は神のみ旨を告げ、神と人とを結びつけるように働くと捉えているが、「聖霊」はイエスを主と信じ、主イエスと人とを結びつけ、救いの確かさを確証する。更にペトロは「賜物として聖霊を受けます」と語っているが、パウロは、このことをガラテヤ書5章22節～23節で「霊の結ぶ実は、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制であり、これらを否定する律法はありません」と説明している。聖霊の賜物は、生きることを肯定し、互いに受け入れ、結び合うように働く。聖霊によってイエスを主キリストと信じ、告白する信仰は、救われた自分を是認し、この救いを隣人と共有するのである。